

## 実践現場と教育現場が協働する実習教育のナレッジデザイン

～精神障害当事者が参加する授業～

京都文教大学 吉村夕里 (04818)

キーワード：利用者参画 ナレッジデザイン 精神障害当事者

### 1. 研究目的

筆者らは、大学における援助専門職の養成教育や社会福祉教育に、保健福祉医療サービスの利用者（以下：利用者）が参画する試みを実施して、その成果を公表してきた。

本報告では、精神科デイケアのメンバーとスタッフが参加する授業の質的分析をとおして、実践現場と教育現場が協働する実習教育のナレッジデザインについての考察を行う。

### 2. 研究の視点および方法

大学等の援助専門職の養成教育では実習教育が大きな位置を占めており、学外で実施される実習教育にとっては、利用者の存在は不可欠である。しかし、大学内の学習環境においては、利用者の存在は不可欠とはみなされていない。利用者は単発のゲストスピーカーやメッセンジャーとして、体験談や生活状況、参加している組織の活動を語ったり、紹介したりすることはあっても、授業のデザイン、教材開発、授業の実施、評価などの大学教育の一連のプロセスに継続的に参加することは稀である。以上は、「利用者を欠いた学習環境における知識や技術や方法の詰め込み教育」と、「大学内で蓄積した知識を実習において応用するという学習モデルの下での勉学」を学生たちに強いる結果となっている。一方、「利用者を援助対象として受身の存在（＝弱者）としてのみ捉える学生」や「利用者との基本的なコミュニケーションの取り方に戸惑ったりストレスを感じたりする学生」が実習で認められるようになってきている。これらの実習での問題に対しては、学生たちのコミュニケーション能力や社会的実践能力の欠如に安易に還元させるのではなく、「実習に入るまでは将来の援助対象者である利用者との関わりをほとんど持ったことがない学生」が存在する現状の改善を図る必要がある。

以上の視点に基づき、筆者らは大学内に 2010 年秋から「障害者交流センター」を設立して、地域の障害者と学生たちとの交流を図ってきた。さらに 2011 年度からは 2 回生を対象としたプロジェクト科目に位置づけて、精神科デイケアのメンバーと学生たちとの交流プログラムを障害者交流センターにおいて定例実施してきた。本報告では、この交流プログラムに対する毎回の授業評価と、関係者への聞き取り調査結果の質的な分析を行う。

### 3. 倫理的配慮

プロジェクト科目である交流プログラムに参加した学生、精神科デイケアのメンバー、

スタッフらに対しては授業記録の研究目的の使用について合意を得るとともに、発表に際しては個人名を明らかにしないなど、プライバシーへの配慮を行った。

#### 4. 研究結果

2011年度の交流プログラムの参加者は、学生実27名(2回生,3回生),精神科デイケアメンバー実15名(20代~60代),スタッフ実4名(看護師,PSW,臨床心理士),教員2名,TA2名,職員2名。また,精神科デイケアメンバーに加えて地域の身体障害とその介護者も毎回参加した。交流プログラムの実施は週1回。デイケアメンバーは年配のグループと若年のグループに分かれて隔週毎に参加。参加の流れとしては,昼前に大学に来た精神障害当事者たちが学生とともに学生食堂で食事をとり,談笑しながらプログラム開始を待ち,1時半の交流プログラムの後にデイケアに戻るという形式が次第に定着。交流プログラムの内容は,参加者の希望に応じてミーティング,サイコドラマ風ロールプレイ,コラージュ,料理などを行った。学生に対しては適宜授業の振返りなどを実施した他,毎回,教員とデイケアスタッフでのカンファレンスも実施した。

当初は学生たちには緊張が認められるとともに,精神障害当事者に対しては「意外に明るい」「案外普通だ」と感じたという感想や,「病気や症状の話にどのように感じたらいいのか」といった戸惑いも認められた。一方,精神障害当事者からは「学生たちともっと交流したい」「病気や症状の話をもっとしたい」との感想が得られた。デイケアスタッフからは「ここに来る時は服装に気を遣うようになったメンバーがいる」「デイケアでは10分と座ってられないメンバーがここでは2時間ほど座っている」「デイケアと自宅を強迫的に往復していたメンバーが買い物に行くようになった」との報告が得られた。

精神科デイケアメンバーの言動からは,彼らが,交流プログラムの場を「社交の場」として位置づけていること,学生の教育に貢献したいという参加動機をもっていることが明らかになった。また,集団活動に入りやすいように学生たちに配慮した振舞いを行っていることも観察された。

従来の養成教育の枠組みのなかでは,利用者は援助対象者として,あるいは病理をもつ人として受身の存在として学生たちに捉えられてきたが,交流プログラムの場では,彼らもつ社交や教育のリソースが発揮されることが確認できた。実習前の教育として,利用者が持っている社会的リソースを知ること,社会的リソースが発揮できる環境の存在を知ることが学生にとって重要だと考えられる。現代のヒューマンサービスの現場では,多職種協働や利用者参加型の実践に対応できる援助専門職の養成が必要とされているが,利用者が存在しない学習環境においてはその素地を形成することは困難である。利用者が存在する学習環境と,利用者の力を実感できる学習環境を養成教育のなかに整備すること,実践現場と教育現場とが協働で実習教育をめぐるナレッジデザインを整備することが必要である。